大人なアナタと子供なオレ

侑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大人なアナタと子供なオレ

【Ｎコード】
Ｎ２１２０Ｄ

【作者名】
侑

【あらすじ】
２３歳の新米高校教師。ある日教頭先生に連れられて行った店先で、１２歳年上の女性に恋をしてしまう。惹かれあう二人・・・しかし二人の間には、超えられぬ大きな壁がある。・・・アナタは壁が立ち塞がっても、愛する人を抱き締める事が・・・出来ますか・・・？

1．年上のアナタとの、衝撃的な出会い

アナタとの出会いは、俺にとってあまりにも・・・衝撃的なものでした。

俺の名前は、追川祐士。
22歳で教員免許を取得し、今年の四月に関西のマンモス校、高倉高校にやって来た新米教師だ。入学式の数日前に、緊張しながら向かった学校の先で伝えられたのは、俺に一年生の一クラスを持たせるとの話だった。あまりにも突飛な話に初めは驚きもしたが、9ヶ月たった今ではすっかり様になり、先輩の先生方にもお褒めの言葉をいただける程となった。

そんなある日、教室にいた俺は校内放送で教頭の佐藤先生に呼ばれ、何かしでかしたかと思いを巡らせながら先生の元を訪れた。

「あの・・・佐藤先生・・・何かありましたか？」

若干どもりながらやって来た俺を、自分の席に座っていた佐藤先生は見上げ、おかしそうにこりと笑った。

「いや、そんなに硬くならないでいいよ。私用で放送を使ったんだが・・・驚かせてしまったみたいだね。すまないね。まぁ、座って」

俺を見上げ楽しそうに笑う先生は誰にでもフレンドリーで、俺は少し肩の力を抜き、勧められるままに椅子に腰掛けた。
俺が腰を落ち着けるのを見届けると同時に、先生はもう一度にこりと笑い、俺を呼び出した訳を話し始めた。

「いきなり呼び出して悪かったね。今夜空いているかと思ってね」

「・・・は？」

にこにこと微笑みながら言われた言葉に、俺はあまりにも間抜けな声を出した。きっと顔をさぞ間抜けだったんだろう。先生はくつ

くつと喉で笑いながら、ひらひらと顔の横で手を振って見せた。
「そんな深い意味はないんだよ？毎年必ず新任の先生と一対一で話をするんだよ。何か困った事はないかってね」
「・・・っあ、なるほど」
「本当は夏休み前にするんだけど、今年は色々と忙しかったからね。急な話ですまないんだけど・・・」
そう言いながら顔を申し訳なさそうに歪めた先生に、俺は笑顔で首を振った。
「いえ、大丈夫です。お気になさらないで下さい」
「そうかい？すまないね。それじゃ終わり次第、落ち合うって形でいいかな？」
「あ、はい。構いません」
「今日は私のお勧めのお店を紹介するよ。和食は大丈夫だよね？」
「もちろんですよ」
「ならよかった。私の教え子の店でね、本当においしいんだよ！」
嬉々として話すその表情は、５０を過ぎた男のものとは思えないほど子供っぽく、俺もこんな風に生徒を自慢する日が来るんだろうかと、心の隅でぼんやりと考えていた。
その間にも先生は話を進めていて、いつの間にか俺一人になっていた。
（・・・先生、嬉しそうだったな・・・。俺もあんな風になれたらいいな）
よっこらしょと、じじくさく言いながら重い腰を上げた俺は、次の授業を行うクラスへと足を進めた。

「・・・よしッ！終了」
仕事を終えた俺は荷物をまとめ、自分の席についてパソコンと睨み合っている佐藤先生の元に向った。
「佐藤先生、こっちは終わりましたが・・・」
「あぁ、こっちも終わっているよ。それじゃ、行こうかね」

「え・・・？あの、先生は・・・」
「ああ・・・これかい？明日の分をしていたんだよ。・・・・・・・よし、行こうか」
「あ、はい」
いつの間にか荷物をまとめ、歩き出してしまった先生に続き、俺は足早に校舎を後にした。

「ここから歩いて１０分位の所なんだよ。明日は丁度休みだし・・・追川先生、酒は？」
「イケる口ですよ。佐藤先生のお勧めの場所ですか・・・楽しみですね」
「おっ！嬉しいこと言ってくれるねー」
にこにこと笑う先生に俺も笑顔を返し、他愛もない会話をしていると、ふと先生が足を止め、一層笑顔を深めこじんまりとした店の戸を引いた。
「ここなんだよ。・・・っさ、入って入って」
促されるままに暖簾をくぐると、明るい声が耳に届いてきた。
「いっらしゃいませ～」
店に入った途端で迎えてくれたのは、若い女性だった。質素な着物に身を包んだ女性はにこやかに笑い、俺の一歩前にいる先生に声をかけた。
「またいらして下さったんですね」
「ええ、まぁ」
二人は顔見知りなのか、そう恥ずかしそうに答えた先生を見据え、女性はもう一度ニコリと笑い、俺に視線を向けた。
「こちらは初めての方ですね」
「あぁ、うちの学校の先生なんだよ。ところで・・・直はもう来ているかな？」
（すなお・・・？）
初めて聞くその名前は、きっと先生の生徒の名前なのだろう。俺

がそんな事を考えている間も二人の会話は進み、やっと席に案内される事になった。
「それではいつもの個室へどうぞ。女将にも先生がいらっしゃったと伝えておきますね」
「すまないね」
「いいえ。失礼致します」
笑いながら先生に頭を下げ、俺にも頭を下げた彼女は足早に去って行った。それを見送り、先生は案内された個室に俺を招きいれ、座敷へと促した。テーブルを挟んで向かい合う形で座った俺は先生のお勧めの料理を尋ねたり、楽しそうに女将さんの話をする先生に相槌を打ったりとしていた。
しかし途中から会話がなくなり、お互い料理名の書かれた紙を見入っていたが、左手首にされた腕時計に視線を向け、ポツリと呟かれた先生の言葉に顔を上げた。
「・・・・・・そろそろかな」
「・・・え？」
「あぁ・・・そろそろ女将が一悶着する頃だ・・・「なんやと！！！？」・・・よ」
先生の話の途中で聞こえて来た怒鳴り声に、俺はびくりと体を強張らせ、先生は苦笑しながら立ち上がり、壁の役目をしている襖を引き、俺を手招きした。
「な、なんなんですか？」
どもり気味の俺を見て先生はある一角を指差した。そこには先程個室に案内してくれた女性と、美しい着物に身を包み若い女性を庇うように立つ女性、そして顔を真っ赤に染め上げ、怒り狂っている中年の男がいた。
若い女性を庇うように、漆黒に輝く髪を後ろでアップにし、背筋を真っ直ぐに正している女性を見て・・・、
（・・・っ）
俺の胸は・・・大きく跳ね上がった。

（・・・・・・なんだ・・・？）
ドクンドクンと、今まで感じた事のないような高揚感に戸惑いを覚えながらも、俺の目はその女性に向いたままだった。
「本当に・・・血の気が多いったらないよ・・・」
苦笑気味に呟かれた言葉は、ただ俺の耳を通過し、俺の耳はあの人の声だけを・・・拾う。

「なんやと？！わしがこん娘にセクハラしたやと！？」
興奮気味にそういった男に対し、凛とした立ち振る舞いの女性・・・女将は柔らかな口調で言った。
「声を抑えて下さい、お客様。他のお客様の御迷惑になってしまいます」
「お前がそんな事言うからやろ！！」
「はい。申し訳ございません。しかし私はお客様も、従業員も大切なので、真意をお尋ねしているだけです」
真っ直ぐに男に視線を向け、女将は良く響く声で言葉を紡ぐ。しかしその言葉さえも酒の入った男には暴言にしか聞こえないのか、さらに声を荒げだした。
「これやから若い女将の店はあかんのや！従業員も従業員なら女将も女将やわ！」
「なっ・・・！」
男の言葉に真っ先に反応したのは、女将の背に隠れていた女性の従業員の方だった。
「女将はっ・・・！」
「由美子ちゃん」
男に掴みかかって行こうとした女性を制し、女将はすっと男の方に歩を進めた。
「・・・お客様」
「なっ・・・なんや」
女将の目に鋭さが宿り、それに気付いた男が怯えた風に一歩後ず

さった。
「お、女将・・・」
「大丈夫やで」
不安そうに自分の着物の裾を掴む従業員の女性に微笑み掛け、女将はゆっくりと笑みを作り、男に向き直った。
「・・・お客様。私の事は自由に仰ってくださって、構いません。・・・けれどこの店を、従業員を貶す事は許しません。この店の味を好いて、足を運んでくださるお客様も居られるのです。・・・あなたにそんな方々までをも否定する権利はございません」
「っく・・・」
「この店は、また訪れたいと思ってくださる方が居られる限り、続けます。・・・私が気に食わないのなら、どうぞ他のお店に足を運んでくださいまし」
「・・・っ、こんな店・・・さっさと潰れてまえばえーわ！」
男は悔しげに捨て台詞を残し、足早に店を後にした。

「女将・・・申し訳ありません！」
男が去ってすぐに女性が頭を下げ、女将は驚いたように目を開いたが、すぐに優しい笑みを浮べた。
それにまた・・・俺の心臓は跳ね上がる。
「大丈夫や。・・・っさ、中に戻り？それからいつものあれ・・・用意しといてんか？」
関西訛りのそれはきつい印象ではなく、何故か柔らかい印象を持たされた。その事に若干驚きながら女将の姿に見入っていると、佐藤先生の声が聞こえた。
「先生？」
「え？あっ、はい！」
ピシッと姿勢を正してしまった俺に先生は苦笑し、驚いたかい？と俺に尋ねた。
「・・・ま、まぁ・・・少しは・・・」

「そうだろうね。・・・全く・・・いつまで経っても気が強くて困るよ。これじゃ、また当分嫁の取り手はいないな・・・」
「・・・え？」
首を傾げた俺に、先生はただ穏やかに笑った。
「高校を卒業してすぐ結婚したんだが・・・お互い仕事が忙しくて、別れてしまったんだよ。・・・娘が一人いてね。高岡にいるんだよ」
「え！？そんなんですか」
「確かクラスは・・・「失礼します。先生、余計な事を喋りすぎですよ」・・・おやおや、お早いお着きだ」
佐藤先生の言葉を遮りやって来たのは、先程の女将だった。怒ったように眉根を寄せ、唇をきゅっと結んでいる様は、大人の女性というよりは・・・可愛らしい、少女のような雰囲気を漂わせていた。女として色香の漂う人が、今は可愛らしく怒っている。
それにまた・・・俺の心臓は大きく跳ね上がる。
（・・・・・・なんなんだ・・・？）
「追川先生？」
「え・・・？あっ、はい！」
自分の胸に手を当て、首を傾げていた俺を、佐藤先生が不審そうに覗き込んだ。慌てて手を離し姿勢を正した俺の耳に、くすくすと可愛らしい笑い声が聞こえた。
声のした方に視線を向けると、さっきまで怒っていた彼女が、口元に手を当て可笑しそうに笑っていた。
（・・・あ・・・笑うと幼く見えるんだ・・・）
コロコロと変わる表情が可愛くて、俺は自分の事を笑われたのに、小さく笑みを零していた。
「ふふ・・・ごめんなさいね、笑ってしまったりして」
「いえ・・・」
向けられた言葉と、柔らかな笑顔・・・。その全てに、胸がざわめいた。
「先生をしていらっしゃるんですって？」

「あ、はい。高岡高校で・・・」
「そうなんですか？私の娘が高岡にいるんですよ。・・・佐藤先生がおっしゃったみたいですけど？」
ちらりと佐藤先生に視線を向け、彼女は悪戯っぽく笑った。
「いや悪かったって・・・」
彼女の言葉に先生は笑顔でそう言葉を返し、その言葉に彼女はくすくすと笑い、まぁいいですけどと呟き、俺の方に向き直った。
「お名前、お聞きしてもよろしいですか？」
笑顔ごと向けられた言葉に俺は戸惑いながらも、自分の名を告げた。すると彼女はゆっくりとした動作で頭を下げ、
「垣ノ内直です」
と名乗った。
「かきのうち・・・さん？」
「はい。・・・もしよければ名前で呼んでくださいな。皆さん名前で呼んでくださいますので」
「・・・いいんですか？」
「もちろん。・・・あ、こんなおばさんの事、名前でなんか呼びたくないかしら？」
「そっ、そんな事・・・！」
直・・・さんの言葉に、俺は過剰に反応してしまった。あまりの声の大きさに自分自身驚いたが、直さんと佐藤先生が可笑しそうに笑い出したのに気付き、俺も照れ隠しに笑みを浮べた。
「はぁ・・・追川先生は優しい方ですね」
笑いすぎて目尻に浮かんだ涙を拭った直さんは、俺と先生にニコリと笑い、当店自慢の茶碗蒸しですと言いながら、テーブルにコトンと小さな器を置いた。
「・・・これは・・・？」
俺が首をかしげながら直さんの方を見ると、今度は彼女が照れ笑いを浮べた。
「先程つまらないものを見せてしまいましたから・・・」

「先生、気にせずに受け取っておけばいいんですよ。直は何かと喧嘩っ早くてね・・・よく一悶着起こすんですよ。高校の時からそうでしてね・・・」
「せっ、先生！余計な事言わないでいいんです！」
今度は顔を真っ赤にして、佐藤先生に怒っている。それを笑いながら交わし、なおも俺に直さんの昔の話をしてくれる。
必死に俺の気を逸らそうとあれこれと頑張っていた直さんだったが、従業員の一人に呼ばれ、渋々と言った感じで連れられて行った。
直さんがいなくなると、先生は表情を曇らせ、俺にこう言った。
「・・・あの子はいつもいつも・・・幸せをつかめそうな時に、不幸のどん底に突き落とされるんだよ」
「・・・・・・・・・」
俺はどう反応を示せばいいのか分からず、ただただ先生を見ていた。そんな俺に気付いたのか、先生は俺に視線を向け、哀しさの残る笑顔を向けてきた。
「追川先生・・・もしよかったら・・・あの子をお願いしますね」
「・・・・・・・・・は、い」
この時は何故、先生が俺にあの人の事を頼んだか・・・正直分からなかった。・・・けど、俺の心が・・・勝手に、そう返事をさせていた。
俺の返事に先生は安心したと笑った。俺も笑顔を見せたが、心の中では・・・先生の言葉がつっかえていた。

食事を終えた終えた俺と先生は店を後にした。帰り際直さんと一言二言言葉を交わし、ほろ酔い気分で二人肩を並べて駅へと向かう。何となしに会話を繰り返していると、駅にたどり着いていた。
「お、もう着いたか・・・」
「本当ですね」
「それじゃ、追川先生。私はこっちなんで」
「あ、はい。今日ありがとうございました」

「嫌々、こちらこそありがとう。・・・それじゃ、また月曜日に」
「お疲れ様でした」
先生と駅で別れた俺はホームに向った。ちらりと時計を確かめると、まだ5・6分、電車が来るには時間がある。
俺は軽く酔いを醒まそうとコーヒーを買い、何気なく空を見上げた。
「・・・・・・綺麗だな・・・」
久し振りに見た空は満天の星空で、俺の脳裏に・・・何故か直さんの姿が浮んだ。
「・・・・・・・・・・はぁ・・・」
ため息をつき、そっと目を伏せた。鮮明に瞼の裏に焼きついているのは、初めて直さんを見た時の姿だった。
凛とした立ち振る舞いに、真っ直ぐな瞳。優しくて、強い人なんだろうと思った。
・・・でも、俺はその瞳に、哀しみを見た気がした。
一人で全てを抱え込んで、苦しむ・・・人に弱味を見せられない、可哀相な人だと思った。
そんな事を言ったら、アナタには怒られるかもしれない。
でも・・・それでも・・・俺はアナタの弱い所を、見せて欲しいと思った。

アナタとの出会いは、俺にとって衝撃的なものでした。
アナタの強いところに惹かれ・・・アナタの弱いところを見せて欲しいと思った。
矛盾したこの想い・・・。
その答えを、まだ俺は見つけられずにいる。

1．年上のアナタとの、衝撃的な出会い（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。
誤字脱字、感想、意見等々・・・あれば是非とも仰って下さい。
これからも、よろしくお願い致します。

2．再会

「・・・はぁ～・・・」

今日の授業も終え、俺は職員室で荷物をまとめ終え、深くため息を吐いた。時刻は１９時を回っていて、職員室はがらんとしていた。そんな中、俺のため息は響いた。

（・・・そーいや・・・最近良くため息してるな・・・俺）

ぼんやりとそんな事を思い、ふと浮んだ顔に、頬を緩ませた。最近行っていない、こじんまりとした料亭。そこの女将、直さんの顔が・・・俺の頭に浮かんでは消え、浮んでは消える。持て余し気味の想いの答えに、俺は気付いている。でもはっきりと、それを認めたくないのか・・・俺は目を逸らそうとしている。

（・・・直さんに、恋・・・。馬鹿馬鹿しい、よな）

緩んでいた頬をパンパンと叩き、鞄を肩にかけ立ち上がる。それと同時に、背後から声をかけられた。

「あっ、先生まだおった～！」

「ん？」

振り返った先にいたのは、俺の担任するクラスの隣の教室の生徒・・・神崎玲だった。俺は時計に視線を向け、首を傾げながら神崎を見た。

「神崎・・・お前まだ残ってたのか？もうとっくに下校時間過ぎただろ？」

「先生勘違いしとるよ～。うちはさっさと帰ったんよ！偉いやろ！」

ふふんと胸を張って笑う姿は幼くて、俺は小さく笑った。

ん・・・？ちょっと待て・・・ならなんでさっさと帰ったはずの神埼が・・・、ここにいるんだ？

「それはね～」

あ、声に出してたのか・・・。間抜けだな～俺。・・・まぁ、いいけど。
自己解決した俺は学校にいる訳を話そうとする神崎を連れ、職員室を出た。だってほら、他の先生の邪魔になるし？
「・・・んで？何でいるんだ？」
改めて聞いてみると、神崎はにっこりと笑った。・・・ん？この笑顔・・・誰かと・・・。
「玲！」
「あ、母さん！」
聞こえた声に、神崎は一層顔を輝かせ、俺の後ろにその笑顔を向けた。俺の耳にも届いたその声は、依然一度聞いた事があって・・・ゆっくりと振り返った俺の目に見えたのは、
「・・・・・直さん・・・？」
困った風に笑う、彼女の姿だった。
俺の呟きが聞こえたのか、神崎は俺と直さんを交互に見比べ、不思議そうな顔をし、直さんは顔を輝かせた・・・ように、俺には見えた。
「あら・・・こんばんは、追川先生」
「こ、こんばんは・・・」
しどろもどろになりすぎた・・・。
そう思い頬をかいた俺に、直さんもクスクスと笑った。その顔を見て・・・俺は胸の奥が締め付けられるのを感じた。ぎゅっと・・・心臓を鷲掴みされるようなこの感じ・・・俺は、知っていた。以前にも感じた事のある、恋の、痛み・・・。
痛みに、脳が警告を鳴らす・・・。この想いは気付いてはいけない。決して報われる事のない恋なのだからと・・・。
でも俺はきっと、アナタに恋せずにはいられないんだろう・・・。
「なんや・・・母さん、先生の事知っとったん？」
「うん。前に話したやろ？」
「・・・あぁ～！お店に来た若い先生って追川先生の事やったん？」

俺が直さんへの想いを確信した間にも、二人は笑顔で会話を繰り返す。そんな二人を見て、俺はふと疑問に思った事を、口にしてしまった。
「・・・二人は親子、なんですよね・・・」
「？ええ、もちろんよ」
「めっちゃ仲えーやろ！」
「・・・その、苗字・・・が」
その言葉を口にして、俺は後悔した。
何故なら・・・、
「・・・・・・・玲は、父親の姓を名乗ってますの。私は旧姓ですけどね」
直さんが辛そうに、哀しそうに顔を歪めたから。
それを見て、俺は彼女がまだ・・・夫の事を忘れられていないと言う事を、悟った。出来る事なら、気づきたくなかった。・・・勝ち目がない事を、思い知らされたくなかったんだ。
気まずい空気が流れ、俺はどうしたものかと思考をめぐらせた。しかしその沈黙はすぐに途切れた。
真っ先に口を開いたのは、神崎だった。
「母さん、今日はお店に行かんのやろ？」
「え・・・あ、うん」
笑顔で切り出された言葉に、直さんは戸惑いがちに言葉を返し、俺も何を言い出すのかと神崎に視線を向けた。
「それじゃ先に車に戻っててや。ウチ先生に提出物出していくから！」
「あ・・・そう？それじゃ先に行ってるね？」
「うん」
「・・・それじゃ追川先生、失礼しますね」
「え、あ・・・はい」
微かな笑顔に胸が締め付けられる。喜びよりも、先程の自分の言動からの罪悪感がまし、まともに顔が見れないまま・・・直さんの

背中を見送った。
「・・・先生」
神崎の声が聞こえ、俺は幾分か低い位置にある神崎の顔を見下ろした。俺を見上げてくる彼女の瞳から読み取れるのは・・・微かな怒り。
「・・・あぁ」
「真剣に、答えてや？」
「・・・分かった」
普段ならこんな子供の言葉に、こんなに真剣に頷いたりしなかっただろう。でも頷いてしまったのは、あまりにも神埼が真剣だったから・・・。
「先生は、母さんが好きなん？」
周りに聞こえないように声を抑えて言われた言葉は、俺の予想内で、その言葉にしっかりと頷いた。
「あぁ」
「でも、母さんは・・・」
「分かってる。・・・旦那さんの事、忘れられないんだろ？」
「・・・そや」
「それでも俺は、直さんが好きだよ」
子供に・・・それも自分の生徒に、何故こんなに真剣に自分の想いを話しているのだろう。
そうは想いながらも、俺の口は勝手に・・・直さんへの想いを綴っている。
「年下の、どこの馬の骨かも分からないような男を・・・直さんが相手にしてくれるはずがないってのは分かってる。・・・でも、どうしようもなく彼女の事が好きなんだ・・・。知り合って間もないし、まだまだ信用を置いてもらえるほどまでいってないは分かってる。でもせめて、チャンスくらいくれないか・・・？」
真っ直ぐに神崎を見つめ、言った言葉に、嘘はない。それは神前にも伝わったのか・・・深いため息をつき、俺の胸に一枚のプリン

トを押し付けた。
「ぁ？」
「提出物。遅れてごめんなさい」
「あ、ぁあ・・・って、おい！神崎！」
俺がプリントを受け取ると同時に、神崎は走り出した。俺が慌てて後を追いかけようとすると、クルリと振り返って、笑顔を見せた。
「せんせー！母さんの事、頑張ってみればぇーよぉ！！」
「！！」
「一筋縄ではいかんと思うけど、先生になら・・・母さん任せられると思ったで～！それじゃあね～！！」
大きく手を振りながら再び駆け出した神崎の背を、呆然と見送り、神崎の言葉を頭の中で繰り返した。
・・・・・・・・・・つ、まり・・・神崎には、認められた・・・っと・・・。
「・・・・・・・・・っしゃ！！！」
グッと拳を握り、俺は喜びを噛み締めた。まだ彼女の娘に認められただけ。でも・・・あの人を振り向かせる為の舞台には、上がれた。
「絶対に・・・あの人を幸せにしてみせる・・・」
俺の呟きは誰の耳に届く事無く、空気に溶けていった。

あの頃の俺はまだ、アナタを少ししか理解できていなかったと思う。
それなのに一人前にアナタを好きだといい、アナタをよく困らせた。
だからこそ、今ならはっきりと言える。
・・・俺は、アナタの事を・・・心の底から愛しています。

2．再会（後書き）

今回も長々と読んでいただき、ありがとうございました。
前回同様感想・意見・アドバイス等々・・・ありましたら是非とも仰って下さい。
これからも頑張っていきますので、よろしくお願い致します。

3．メールアドレス

3．メールアドレス

神崎に認められたあの日から、俺の猛アピールが始まった。
最初の方は休みの日に一人で行ったりとしていたが、そろそろ一人で行くのも辛くなってきた。学校がある場合、昼を校外で取ることは難しい。なら夜に行くしかない・・・そう考えた俺は、友人を誘い、直さんの店を訪れていた。

「珍しいな、お前がメシ食いに行こうなんて。おまけにこんな料亭とか・・・」
「あぁ・・・たまにはいいだろ？」
度のきつくない酒を喉に流しながら笑うと、中学校からの友人の不二はニヤリと笑った。
「んで？」
「・・・ん？」
嫌な笑みを浮かべ、俺の方に顔を近づけてきた不二に、俺は内心舌を巻いた。
・・・こいつは中坊の時から勘が鋭いかったよな・・・そのお陰で嫌な思い出が絶えなかったっけ・・・。ぁあ・・・思い出すだけでも寒気がする。
俺が微かに体を震わせると、不二は一層二ヒルに笑った。
「だ～か～ら～何で俺を呼んだんだ？」
「・・・・・・そ、それは・・・」
こいつは俺が呼んだ理由を知っていて、聞いてくるから性質が悪い。俺が言いよどんでいると、不二はニッと笑った。
その笑顔はニヒルなものではなく、純粋で歳相応・・・って言うのはおかしいかもしれないけど、自然な笑顔だった。

「ハハハハハ！お前が俺を呼ぶ時はだいたい恋の悩みを抱えてる時だ。・・・な？今度はどこのどいつだ？」
「・・・・・・お前、絶対楽しんでるだろ？」
「あん？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ンな訳ねぇーよ」
「・・・その間が怖ぇよ」
「ハハッ！まぁ、いいじゃねーか。・・・で？誰？年上？年下？女？男？上？中？下？」
「・・・いやいやいや・・・ちょっと待て、今明らかにおかしいもんあったろ・・・」
ブンブンと顔の横で手を振って見せると、不二は楽しそうに笑い、正面に座っていたのにわざわざ俺の隣にやって来て、肩を組んだ。
「ほらほら・・・吐いちゃえって」
「お前は・・・」
「質問に乗ってやるにも、相手がどんなか聞かなくちゃ分かんねーだろ？ん？ん？」
「・・・だぁぁあああぁあ！！ちゃんと言うって！」
肩に乗っかるようにして迫ってくる不二から逃れ、俺は不二が座っていた方の席に着き、すうっと深呼吸し、口を開き・・・
「失礼します」
・・・直さん？？？！！！
個室の障子を引き、中に入って来たのはまさに今、俺が話そうとした人物だった・・・。
「す、直さん・・・」
「あ、追川先生いらっしゃいませ。・・・そちらの方は初めてですよね？ようこそおいで下さいました。本店の女将、垣ノ内直と申します」
「あ、どうも。俺はこいつの友人の不二慎介って言います」
ぺこっと頭を下げた不二に、直さんは薄く笑う。・・・その事にさえ、嫉妬してしまう俺は・・・よほど直さんにはまっているのだろう。

自嘲気味に笑っていると、
「！！？」
直さんの顔が目の前にあった。
ビクッと肩を上下させ一歩後ずさると、直さんが困ったように苦笑いを零した。
「大丈夫ですか？追川先生」
「え・・・あ、はいっ」
「・・・お疲れですか？」
「い、いえ！大丈夫です」
「そうですか？・・・・・・ならよかった」
「っ・・・」
ふにゃりとした笑顔を向けられ、顔に熱が集まっていくのが分かる。それと同時に心臓が激しく動き出し、息をするのさ辛い。
・・・そんな俺を見て、不二がニヤァーと厭らしく笑った。
「・・・・・・・・・・ハァ～ン」
「ん、んだよ・・・」
「あぁ、いい、いい。誰なのか分かっちゃったから」
俺が紅く染まったままの顔を向けると、不二はぷらぷらと手を振り、知らん顔して酒を飲み始めた。
俺がどうしようかとアタフタしていると、直さんも俺と不二を見比べ、アタフタとし始めた。
二人でアタフタしていると、一人平静を装っていた不二が笑い出した。
「・・・くっ・・・くくっ・・・くくくく」
「？」
「・・・ブッ！アハハハハハ！！あ～マジ、ウケるよ！追川も直さんも天パリ過ぎだろ～！！あ～もぉ、腹痛ぇーよ！！」
ゲラゲラと一人腹を抱えて笑い出した不二を見て、俺と直さんはポカーンとしていた。けど次の瞬間、
「・・・プッ！フフ・・・アハハハハ！」

直さんも笑い出した。
口元に手を添え、最初は上品に笑っていた。でもすぐに無邪気な笑みに変わって、俺も二人につられるように笑い出した。
「・・・ハァ・・・あ～よく笑った」
「本当に。こんなに楽しかったの、久し振りだわ」
俺が笑いすぎて途切れがちになった息を戻しながら言った言葉に、直さんが笑顔で言った。それも・・・普段使わないタメ語で。
それは不二も気付いたらしく、ニコッと笑いながら直さんに言った。
「直さん、やっぱり敬語使わない方がいいですよ」
「・・・え？あ、やだ・・・私ったら・・・」
「俺もそっちの方がいいと思いますよ」
「・・・そう、ですか・・・？」
「はい。あ、俺達の前限定でいいんで、敬語、やめて下さいよ」
不二の言葉に俺も頷くと、直さんは了承してくれた。
俺は小さく笑顔を零し、直さんに声をかけた。
「・・・・・・・・・・・・・・あの、直さん」
「は・・・じゃなかった、何？・・・でいいのかな？」
照れたように笑った直さんに、俺は自分でも驚くような事を尋ねていた。
「・・・・・・・・・・・・メルアド、教えてもらえませんか？」
「「！！」」
直さんはもちろんの事、不二まで驚いて目を瞠っている。それもそのはずだろう・・・俺は恋愛には超が付くほど臆病で、自分からメールアドレスを聞くなんてもっての他。
・・・でもそんな事かなぐり捨ててでも、直さんに俺を見て欲しかった・・・。
「えと・・・」
「・・・・・・・・・・・・（へぇ・・・追川にしては積極的じゃん）」
戸惑っているのか、それとも教えようか考えていかのような直さ

んを、じっと見据えている俺を視線の端に捉え、不二はピュ～と小さく口笛を吹いた。
「「「・・・・・・・・」」」
誰も口を開かずに、すでに何分が経ったんだろう・・・いや、実際は一分にも満たない時間なんだろうけど、俺にはあまりにも長い時間に感じた。玉砕覚悟で言った言葉・・・でもそれが俺と直さんとの距離を、ほんの少しでも縮めてくれるまで・・・あと少し。
「・・・え、と・・・いい、ですよ」
悩んだ末の結論だろうが、直さんははにかみながら、俺にそう言った。耳に届いたその言葉に一瞬息を吸うのも忘れ、俺は頭の中でその言葉をリピートした。
そして言葉が理解できると、
「・・・っ本当ですか？！」
満面の笑みで、子供みたいに無邪気に、俺は笑った。
そんな俺に直さんは笑って頷き、悪戯っ子のような顔をして・・・
他のお客様には内緒ですよ？と、そう言った。
俺は笑顔で頷き、不二に視線を向けた。
不二は自分の事のように、笑顔で俺によかったなと・・・言ってくれた。
「それじゃ・・・携帯今持ってないから、追川先生のアドレスを教えてもらえる？」
「あ、はい！」
俺は自分のアドレスと、電話番後を紙に書き、直さんに渡した。
電話番号は・・・もしよければ掛けて欲しいなという、淡い願望を込めて、書いたものだった。
紙を渡す際に、微かに触れた指先にさえ、意識がいってしまう。そんな些細な事でさえ、喜んでしまう単純な自分に呆れ、自嘲してしまう。
「・・・はい。分かりました。んーと・・・１０時辺りから休憩、取れるから・・・その時にメールするって事でいいかな？」

俺の渡した紙を片手に首を傾げた直さんに、俺は笑顔で頷いた。
それに直さんも笑顔を見せてくれ、そろそろ戻るねと言葉を残し、去って行った。
「・・・・・・はぁぁぁぁぁぁ」
「ハハ！お前にしては頑張ったな！」
直さんが去ると同時に、俺は大きく息を吐き出した。不二は満面の笑みで俺の隣に来て、肩を抱きながら酒を注いでくれた。
「お疲れさん。ま、飲め飲め」
「・・・ありがとな、不二」
「ん？・・・おぅ！」
いくら腹黒くて、勘が鋭くて、扱いにくい友人でも・・・俺は相当こいつの事を信用しているんだなと、改めて思わされた。
それから数時間して、俺たちは店を後にした。真っ直ぐに帰ると言った俺と、寄り道してから帰ると言った不二は店の前で別れ、俺は急ぎ足に家に戻った。

家に戻った俺は急いで風呂に入り、携帯片手にベッドに正座し座っている。
すでに時刻は１０時を過ぎていて、俺の心臓は破裂しそうなくらい高鳴っていた。
・・・あぁ～、ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！！！！マジで心臓破裂しそう！！
俺が携帯を両手で握り締め悶えていると、
「っうぉお！！」
携帯がなり始めた。ディスプレイを見ると・・・知らない番号！直さん！？
「はっ、はぃ！！」
緊張と、焦りと、喜びと・・・すべてが入り混じった俺の感情は、声を裏返すという表現で、表に出てしまった。
うぅ、声が裏返った・・・直さんに情けな・・・

『ハハハハハハ！！お前っ、声裏返りすぎ！！』
・・・ってお前か、不二ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！！！
「てっめ！俺今真剣に恥ずかしかったんだけど？！それにめっちゃ勇気いったぞ？！」
俺が泣きそうになりながらそう言うと、不二は軽やかに笑い、携帯変えたんだと言った。
「んな事知らねーよ！今度掛けてこいよ！」
『いや～もぉーメールあったかな～と思ってさ』
「っ・・・」
不二の言葉は、俺の心を抉った。直さんにアドレスを渡した、と言う事は・・・俺からは連絡を取れないって事を意味している。直さん次第で・・・俺のこの想いは、報われるか報われないかが決まる・・・。
『・・・ふむ。その調子じゃ・・・まだ来てないみたいだな』
「・・・・・・・・・あぁ」
電話越しに聞こえる不二の声が、冷たく感じたのは、これが初めてだった。
『んで？お前はもうこないと、思い込んでいると？』
「・・・っ」
呆れたように言われた言葉に、俺は顔を歪め、言い返そうと口を開いた時、不二がなおもこう言った。
『・・・あのさ～気休めにしか聞こえないかもしれないけどさ、お前、いい男だよ』
「うぇ？！」
怒ろうとしたのも忘れ、俺は不二の言葉に盛大に顔を歪めた。それは電話越しでも分かったのか、不二が楽しそうに笑った。
『んなに嫌がんなって。俺は事実を伝えたまでだよ。・・・ま、頑張れよ？そろそろメール、くるかもしれないから切るぞ？』
「・・・・・・・・・・・・あぁ」
今初めて、何で不二がこんな時間帯に電話してきてくれたのか、

その意味に気付いた。
不二は俺をからかう事で、俺を勇気付けようとしてくれたんだろう。不器用な優しさに、俺は微かに頬を緩めた。
じゃあな、後でアドレス送るから。そう言い一方的に不二は電話を切った。俺も電話を切り、壁に掛けてある時計に目を移した。
「（・・・１０時１５分か・・・不二に励まされちゃったんだし、希望は残しておかなくちゃな・・・）・・・はぁ」
俺は本日何度目になるか分からないため息を吐き、ベッドに大の字で寝転がった。右腕を額に乗せ、明かりの眩しさに目を細める。
「・・・・・・・・・・あ、ヤベ～な・・・寝そう・・・」
瞼が段々と重くなってきた。ベッドに寝転んだのが失敗だったかな、なんて頭の片隅で考えながらも、体を動かしのも面倒になってきた・・・。
もう・・・寝てしまおうかな・・・。
そう思ったのと同時に、
「・・・ん？」
携帯が鳴った。今度はメールがきた事を伝える着信音。
「・・・あぁ、そう言や・・・不二がメール送ってくるって、言ってたな・・・」
思い左腕をゆっくりと目の高さに上げ、画面に映っている新着メールを選択した。カチャカチャと睡魔と闘いながら携帯を操作していた俺は、本文に目を通していた。しかし次の瞬間、大きく目を開き俊敏な動きで起き上がる事となった。
何故なら、
「・・・・・・直、さん・・・」
メールの差出人が直さんだったからだ。
「・・・嘘だろ・・・マジで？！」
俺はピョンッと、さっきまで体が重かったのが嘘かのような動きでベッドから飛び降り、喜びに震える声で、メールを読んだ。
「『こんばんは、直です。遅くなってしまってごめんなさい。やっ

と休憩に入れたんですよ。先生はもうお休みかしら?起こしてしまったならごめんなさい。いつでも連絡してきてくださいね』・・・・・・・・・よっしゃぁぁあああぁあ!!!!!」

グッと拳を握り、俺は夜中にも構わず大きな声で叫んでしまった。もうこないんではないか・・・そう思っていたからこそ、喜びは大きかった。

「うわぁ～うわぁ～うわぁ～!!めっちゃ嬉しい!!うわぁ～!!」

メールを何度も読み返し、俺は幸せを噛み締めた。今まで生きてきて、こんなに嬉しかった事はあっただろうか・・・?

「何て返せばいいんだろ?うわぁ～・・・どーしよ!悩むなぁ!」

口ではそう言いながらも、俺はきっと満面の笑みを浮べているだろう。

「やっぱここは無難にメール送っとくか!」

メール一件送るのに、ここまで緊張した事も、きっとこれからの人生・・・ありはしないだろう。たかだか数行の文を打つ為に、俺は5・6分もかけてしまった。

そして送信ボタンを押すのにさえ、1・2分・・・いや、もしくはそれ以上の時間、悩んだかもしれない。まぁ、結局は送ったんだけどね。

それから数回、直さんから返信が来た。その度に俺は飛び上がって喜び、自分でも単純な奴だ思いながらも、幸せを噛み締めた。

その日の夜は、すっかり目が覚めてしまって眠れず・・・興奮冷め止まぬまま不二に電話し、うるさいと怒られた。

ほんの少し、本当に少しの距離かもしれないけど、アナタとも距離が縮まった気がした。

嬉しくて、幸せで・・・あの時の俺はまだ気付いてはいなかった。

その幸せが、長くは続かない事を。

気付く術もなかった・・・いや、もし気付いていたとしても、俺は目を瞑っただろう。

今手の中にある幸せを、失いたくなくて・・・。

3．メールアドレス（後書き）

この度も長々と読んでいただき、ありがとうございました。
これからも頑張っていくので、ご支援のほど、よろしくお願い致します。
また、感想・意見・誤字脱字等々・・・ありましたらぜひと仰って下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2120d/

大人なアナタと子供なオレ

2010年10月17日05時00分発行